

# 文化の扉

## 連句 コラボの妙味

1人が五七五を詠んだら次の人が七七七を詠み、また別の人が五七五……と、長句と短句を連ねる「連句」。現在の俳句の母体であり、かつては連句が主流だった。他人と共に創作する「座の文芸」のだいご味が、今また注目されている。

筆と硯を置いた卓を囲み、にぎやかな話し声が響く。歌人の岡野弘彦さん(93)、文芸評論家の三浦雅士さん(70)、俳人の長谷川権さん(63)が毎月開く連句の会。36句詠むので和歌の名手三十六歌仙にちなみ「歌仙」という。松尾芭蕉以来、連句で最もポピュラーな形式だ。流れは「序破急」で表される。

敵かな場かと思いきや、1人が黙考中に他の2人はしゃべっている。岡野さんと三浦さんは、句ができる「捌き」役の長谷川さんにみてもらう。捌きは式目というルールに則しているかを判断し、時に修正も提案する。一句一句も作品で、全体も一つの作品。捌きは連句の深みや広がりやを左右する重要な役どころだ。「視点を転換し、発想の飛躍で一座を驚かせるのが面白い」と三浦さん。歌仙の粋を「切断と再結合」にみる。

この席では、緩↓紐↓地震↓「プーさん抱いて泣くほどこの子」(權)と展開し、5時間かけて11句まで詠んだ。連句を詠むのは「巻く」といい、歌仙のタイトル「○○の巻」は最初の句「発句」の中から取る。今回は「秋蟬の巻」となった。

歴史は和歌にさかのぼる。和歌から、五七五、七七七をみやびな言葉で詠み合う連句が中世に生まれ、滑稽や諧謔味を加えた「俳諧の連歌」が派生して江

### 36句詠み合う「歌仙」主流 未知の展開楽しむ

戸時代に確立した。これが今でいう「連句」だ。芭蕉や与謝蕪村はその宗匠(先生)で、当時「句を詠む」とは基本的に連句だった。蕪村の「菜の花や月は東に日は西に」など、近世までの有名な句は発句が多い。ちなみに今の俳句は発句が独立したものだ。明治時代に正岡子規が俳句を推し進め、連句の呼び名は高浜虚子が定着させたといわれる。式目は多い。歌仙なら花の句を2度、月を3度、一定の場所(定座)に詠む「二花三月」や恋の句を入れるなど。前の句や前の前の句とイメージが似すぎてもだめだ。他にも細かくあるが、日本連句協会の高尾秀四郎副会長(68)によると、式目の縛りは人や団体で様々らしい。「最低限の決まりを覚えれば捌きもいるので難しくはない。何より一座でのコミュニケーションを楽しんでほしい」と話す。

愛好者は中高年が主体だが、最近では若者も増え、新しい形式が生まれている。連句人を名乗る俳人の浅沼環さん(60)は、大学で連句を教える。初心者も学生は決まり事の多さに挫折しがち。そこで式目を簡略化し、6句を一つの単位として積み上げる「オン座六句」という形式を考案した。6句ごとなので、学生や社会人など長い時間を割きにくい人も取り組みやすい。「言葉のコラボは世代を超えて楽しめる。座の文芸の豊かさを



イラストレーター 矢吹申彦さん

### 大きな物語になる

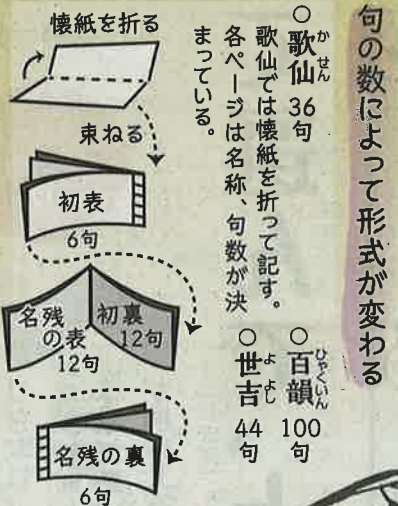
連句では、前の人が何を考えていたのかを考えるのが楽しい。それで自分を生かしたり、殺したり、くっつけたり、ぶつ切ったり、つながったり。僕自身は気心の知れた人と巻くのが好きです。なぜその句が出てきたのかもわかるし。そのうえで時にひっくり返しちゃうたりもするんだけど。一人一人の意思を通した句が大きな物語になっていくのも魅力。何十年前に、イラストレーター仲間の和田誠さん、グラフィックデザイナーの麴谷宏さんとファクスで連句を巻いたのが最初です。その後和田さんと歌人の笹公人さん、俵万智さんと巻いて「連句日和」(自由国民社)を出版しました。他人と組んで遊ぶ面白さは、イラストや装丁の仕事に通じるかもしれません。読み返すと時事句も多く、全体から時代性がにじむ。そんなところも好きです。



金子みすず、この詩は「みすず」と読むよ。名前が「私と小鳥と鈴と」の一部で、「こたまでしようか」という詩も知られているよ。長門市に記念館があるよ。

### 連句って何?

複数の人が、五七五・七七(それぞれを一句と数える)と詠み合う集団創作の文芸。時に大胆な展開や変化を見せつつ、全体を通じて醸し出される趣をたのしむ。



### 連句用語

拳句 全体の最後の句  
式目 ルール  
捌き 進行役。全体のコーディネーター  
定座・二花三月 式目のひとつ。歌仙の場合、二花三月として、花や月の句を複数回、一定の場所に入れる。  
付ける、付く 前の句を受けて詠むことを「付ける」。意味や句の情景が似ているのは「付きすぎ」。



江戸時代には芭蕉・一茶・西鶴・蕪村も連句に熱心だった。

### 現代の歌仙

#### 秋蟬の巻

岡野弘彦(号乙三) 三浦雅士 長谷川権・捌き

秋蟬の身のおとろへや九十路  
発句: 最初の句を「発句」。この発句が独立し、俳句になった。【乙三・秋】

色なき風の果は弱法師  
脇: 李語がない句 【權・秋】

月のもと高架を走る東海道  
二花三月 第三・三句目 【雅士・秋】

箱根をすぎて富士のすがしき  
脇: 李語がない句 【乙・雑】

湧き水を鰻自在に泳ぐなり  
【權・夏】

宇宙を統べる紐の振動  
【雅・雑】



グラフィック・田中和

### 聞く

朝日俳壇・歌壇選者の稲畑汀子、大串章、金子兜太、長谷川権、佐佐木幸綱、高野公彦、永田和宏、馬場あき子

の各氏が前もって詠んだ歌仙を披露し、語り合う会を10月20日午後1時に東京・有楽町朝日ホールで開催。金子さんは当日欠席。3500円。朝日カルチャーセンター(03・3344・2041、日・祝日休み)。